

佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 第47号 (2019年3月)

研究ノート

# ポオ “The Tell-Tale Heart” の五四前後の 漢訳について

—— 周瘦鵬と沈雁冰の翻訳を中心に ——

白 須 留 美

## 〔抄 録〕

清末から民国初期にかけて、中国では西洋小説の翻訳が活発に行われた。初期の翻訳ブームでは、文言文での翻訳や加筆、翻案が多く見られる。原作を忠実に訳す動きが活発化していくのは、五四運動以降のことである。本稿では、民国初期に翻訳家として活躍した周瘦鵬が、1917年に翻訳した『心声』と、五四運動以降に『小説月報』などを中心に翻訳論を展開した沈雁冰が、1920年に翻訳した『心声』をテキストと使用し、両氏の翻訳を分析することで五四前後の翻訳小説の変化を知る具体的な一例としたい。『心声』は、エドガー・アラン・ポオ（1809～1849）の短篇小説“The Tell-Tale Heart”（1843）を原作とする。前稿「包天笑の翻訳小説『赤死病』について」では、包天笑の訳が邦訳からの重訳であることを明らかにした。当時は日本語からの重訳が多く見られるが、両氏の翻訳は共に英語から直接に訳している。それ故にポオの原作に対する両氏の翻訳姿勢を鮮明にすることができる。

キーワード：周瘦鵬、沈雁冰、心声、The Tell-Tale Heart、五四運動

## はじめに

清末から民国初期にかけて、中国では西洋小説の翻訳が活発に行われるようになった。西洋小説の翻訳は、西洋の文化や思想などを伝えるのみならず中国に新しい形の文学をも齎した。梁啓超が提唱した政治小説<sup>(1)</sup>はその一つであり、科学小説や探偵小説、児童小説なども新たに入った文学の形である。中国人の手に拠る翻訳小説として最も早いものは、1872年に雑誌『瀛寰瑣記』（第3期～28期、1872年12月～1874年12月）に掲載した『昕夕閑談』（エドワード・ブルワー＝リットン著、“Night and Morning”<sup>(2)</sup>）とされる<sup>(3)</sup>。

以後、西洋小説の翻訳ブームが起き、多くの翻訳家を輩出した。その中で大きな影響を与え

た翻訳家の一人に林紘（1852～1924）がいる。彼は、『巴里黎茶花女遺事』（1899、デュマ著『椿姫』）や『黒奴吁籲天録』（1901、ストウ夫人著『アンクルトムの小屋』）など180作品にのぼる小説の翻訳を手がけた。ただし林紘は外国語に通じておらず、彼の翻訳はもっぱら外国語に精通した人物を介して中国語に訳すというものであった。この為、彼の翻訳は原文を忠実に翻訳するというよりも翻案作品である。彼の翻訳スタイルの特筆すべき点は、西洋小説を流麗な文言文で翻訳したことである。この翻訳スタイルは知識人に広く受け入れられ、以後西洋小説の翻訳は文言文で訳すことが主流となった<sup>(4)</sup>。無論白話文での翻訳もみられるが、文言文と比べると少ない。白話文での翻訳が主流となるのは五四運動以降である。

当時、西洋小説は雑誌や新聞で大量に訳されるようになったが、翻訳ブームの初期のころは原文からの翻訳よりも、すでに欧米の翻訳が進んでいた日本語からの重訳が多くを占めていた。それに加えて、翻案や誤訳、主人公の名前や道具などの名称を中華風に変更するなどといった点も多く見られた。こうした状況は日本の翻訳小説の初期に見られるものと同様である。

その後、日本の翻訳が漢文調から次第に口語調へと変化したように、中国においても文言文から白話文へと移行していった。同時に、これまでの翻案、加筆などの点を排除し、原作を正確に翻訳していくという動きが活発化していく。翻訳の方法に関して活発な議論がなされるようになるのは、五四運動以降のことである。

まさに五四運動を境にして中国の翻訳史は変化を迎えたと言えるわけだが、これについては既に多くの先行研究に述べられてきたことである。しかし五四運動前後の翻訳の変化において、翻訳された作品を詳細に見ようとする研究はあまり多くない。作品を具体的にみることは当時の翻訳の状況を知る上で非常に重要な工程と考える。

本稿では、民国初期の翻訳家として多くの作品を翻訳した周瘦鵬と、五四運動以降に『小説月報』などを中心として翻訳論を展開した沈雁冰の両者が翻訳した短篇小説『心声』をテキストとして使用し、両者の翻訳を分析することで当時の翻訳小説の変化を知る具体的な一例としたい。『心声』は、エドガー・アラン・ポオ（1809～1849）の短篇小説“The Tell-Tale Heart”（1843、邦題『告げ口心臓』<sup>(5)</sup>）を原作とする。周瘦鵬は1917年<sup>(6)</sup>、沈雁冰は1920年<sup>(7)</sup>にそれぞれ訳している。

『心声』をテキストとする理由としては、五四前後に見られる翻訳上の変化を同一のテキストから見るができる。また周瘦鵬は翻訳家であると同時に鴛鴦蝴蝶派の代表作家であり、沈雁冰は新文学派を代表する作家である。前稿「包天笑の翻訳小説『赤死病』について」<sup>(8)</sup>では、周瘦鵬と同じく鴛鴦蝴蝶派の代表作家である包天笑の『赤死病』（原作、エドガー・アラン・ポオ“The Masque of the Red Death”）の訳が日本語からの重訳であることを明らかにした。当時は日本語からの重訳が多くみられるものの、周瘦鵬と沈雁冰の翻訳は共に英語から直接に訳している（これについては節2-1で述べる）。英語から直接に訳していることで、ポオの原作に対する両氏の翻訳姿勢を鮮明にすることができると思う。

## 1、周瘦鵑と沈雁冰の翻訳姿勢

まず周瘦鵑と沈雁冰の翻訳に対する姿勢をみていきたい。ここでは『心声』を翻訳した時期を中心として両氏に關係する資料からその翻訳に対する姿勢を探ることとする。

### 1-1、周瘦鵑の翻訳姿勢

周瘦鵑(1895~1968)は、上海出身で、本名は周祖福、字は国賢。筆名は周瘦鵑、泣紅などがある。民国期に翻訳家、編集者、作家として活躍し、後に園芸家としても名を馳せる。周瘦鵑は貧しい家庭の出ながらも、上海の中学校に進学した。彼は在学中に英語で書かれた作品を多く読み耽り、卒業後は英語教師として中学校に留まる。しかし中学在学中より雑誌へ投稿を繰り返していたことで、後に彼の作品が包天笑(1876~1973)の目に留まり、作家としての道が開かれ職業作家へと転身した。その後、欧米作品の翻訳や創作活動などで人気を博し名声を得ていった。周瘦鵑の翻訳活動は、1910年代~20年代をピークとし、その後は次第に減っていくものの、翻訳数は489作品にもものぼるとされる<sup>(9)</sup>。また創作活動も活発に行っており、『小説月報』や『禮拜六』、『紫羅蘭』など多くの雑誌に発表していた。

周瘦鵑は多くの翻訳を手がけていたにもかかわらず、翻訳に対する考えを述べた資料は少ない。『心声』を翻訳した時期に彼の翻訳姿勢に関する資料は見つからなかった。彼の翻訳観を窺い知ることのできる数少ない資料としては、1928年の『上海画報』第406期(10月27日)の「胡適之先生談片」がある。周瘦鵑と胡適の出会いには1928年3月に胡適が仲人を務めた結婚式であった<sup>(10)</sup>。二人は初対面であったが、周瘦鵑はこの時胡適に談話の約束を取り付けた。「胡適之先生談片」は、胡適との二時間に亘る談話の一部を記事として掲載したものである。

胡適は対談中、周瘦鵑に雑誌『新月』(第1巻第7号、1928年9月)に掲載した自身の翻訳作品『戒酒』(オー・ヘンリー著)を見せ、以下のようなやり取りを行った。

私が「先生の翻訳は本当に原作どおりに直訳していますか？」と尋ねると、胡先生は、「直訳できるものは直訳するが、もし訳しても人にわからない言葉であれば省略もやむを得ないだろう。たとえばこの『戒酒』の中でも、いくつか省略している。」と言いながら立ち上がり、オー・ヘンリーの原著を取って私にみせてくれた。「見てごらん。この初めの数行は全てアメリカの土着訛りで書かれ、訳すのはとても大変だ。たとえ訳しても誰もわからないだろう。だから私はその意味だけを取り、一言でまとめたのだ。」と。私は、「僕は先生の訳されたものがとても好きです、いつもわかりやすい」と言うと、胡先生は、「翻訳は当然明白であるのがよく、私の訳す短篇小説は、いつもまず妻と子供らに読み聞かせる。彼らがもし理解できたならば、もう他の人が理解できないと心配することはないからね。」と言った<sup>(11)</sup>。

上記から周瘦鵬は、胡適が述べる翻訳方法に対して、好印象を持っていたことがわかる。この部分から判断するに周瘦鵬は、胡適の考えに同調していたと考えられる。つまり周瘦鵬自身も読者にわかりやすい翻訳を心掛け、そのためには意識や原作の改変もやむを得ないと考えていた可能性が高いだろう。

### 1-2、沈雁氷の翻訳姿勢

次に沈雁氷の翻訳に対する姿勢を見ていこう。沈雁氷（1896～1981）は、浙江省桐郷県の出身で、本名は沈徳鴻、字は雁氷。筆名は茅盾、玄珠など60以上みられる。北京大学預科第一類に入学するものの、経済的困窮から本科進学を断念する。1916年、商務印書館編訳所に就職すると、英文部で科学小説などの翻訳、論文の執筆に携わるようになる<sup>(12)</sup>。1920年から『小説月報』の主編を務め、海外文学の紹介、文学論、翻訳などの執筆を精力的に行う。

沈雁氷の翻訳観を知るための資料は周瘦鵬と異なりいくつも見られる。主に沈雁氷が『心聲』を訳した1920年代の資料では、「通訊 翻訳文学書的討論——復周作人」（『小説月報』第12巻2号、1921年2月）、「訳文学書方法的討論」（『小説月報』第12巻4号、1921年4月）、「介紹外国文学作品的目的」（『時事新報・文学旬刊』第45期、1922年8月）、「『直訳』与『死訳』」（『小説月報』第13巻8号、1922年8月）、「介紹西洋文芸思想的重要」（『民国日報・覚悟』、1922年11月19日）などにそれが書かれている。

沈雁氷は、翻訳は直訳すべきだと主張している<sup>(13)</sup>。しかしただ直訳するだけでは、「看不懂（読んでもわからない）」・「看起来很吃力（読むのに苦労する）」であり、そうした訳は「死訳」であって、直訳とは言えないとした<sup>(14)</sup>。また原文を忠実に訳すことは当然とし、それに加えて原文の情緒と風格を残すことも翻訳に求めた。それ故、翻訳する際には細心の注意が必要だとした。沈雁氷は、翻訳の最大の難題として中国と西洋の文章の違いをあげ、翻訳は原作の「形貌（形式）」と「神韻（風格）」を同時には保てないとした。そこで沈雁氷は「私の個人的判断では「神韻（風格）」が失われて「形貌（形式）」を保つよりも、まだ「形貌（形式）」に少し差異があったとしても「神韻（風格）」を残したほうがいいだろう」と述べている<sup>(15)</sup>。

以上の資料より知り得た周瘦鵬と沈雁氷の翻訳に対する姿勢は、『心聲』を分析する上での重要な鍵である。以下、底本と段落構成にそれぞれの特徴を捉えつつ『心聲』の分析をおこなっていきたい。

## 2、『心聲』のテキスト

### 2-1、底本

周瘦鵬と沈雁氷の翻訳分析に入る前に、彼らが使用した“The Tell-Tale Heart”の底本について見ておきたい。

“The Tell-Tale Heart”は、1843年に雑誌“The Pioneer”<sup>(16)</sup>に掲載されたポオの短篇小説である。この作品は、主人公の男の一人語りにより、自身の犯した罪について語る方法を取っている。主人公の男は同居する老人の秃鷹のような眼に恐怖を感じるようになる。彼は深夜になると老人の部屋に潜り込み寝ている老人の眼にランタンの微かな光をあてるという狂気じみた行為に及ぶようになる。ある日、いつもと同じように老人の部屋に忍び込んだ際に、微かな物音を立ててしまい、そして目を覚ました老人を殺害してしまう。男は自身の犯行を隠し通せたいと思ひ、翌日家に来た警察に対して初めは何事もなく振舞うが、次第に死体を隠した床下から聞こえてくる心臓の音に狂乱し、ついには自ら死体の在りかを暴露する。男は老人を殺害することで彼の眼への恐怖から解放されると思ひ殺害に及んだものの、次に死んだ老人の心臓の音を恐れることとなる。この作品は男の狂気、妄想から理解し難い恐怖を感じさせるポオの代表作のひとつである。

ポオ全集“The Complete Works of Edgar Allan Poe”<sup>(17)</sup>によると、“The Tell-Tale Heart”には大きく分けて三つのテキスト(1)“The Pioneer”、(2)“Broadway Journal”<sup>(18)</sup>、(3)“The Works of the Late Edgar Allan Poe”(1850~1856、以下、【Griswold】)が存在する。

(1)は“The Tell-Tale Heart”の初出雑誌、(2)は1845年に再掲載した雑誌、(3)はポオの死後に遺著管理人となったグリズウォールド(Rufus Wilmot Griswold、1815~1857)によって刊行された作品集である。周瘦鵬と沈雁冰は、共に“The Tell-Tale Heart”の訳である事を明言しているが、どのテキストを使用したかについては明らかにしていない。

上記の三つのテキストにはそれぞれ文字の異同、強調の箇所が複数あるが、大きな変更はあまり見られない。しかし(1)及び(2)のテキストを使用する場合と、(3)のテキストを使用する場合とでは翻訳の違いが現れる箇所が1点見られる。それは第二段落の老人の眼についての描写箇所である。(1)“The Pioneer”と(2)“Broadway Journal”のテキストでは、‘He had the eye of a vulture’ (彼は秃鷹のような眼をしている)とあるが、(3)【Griswold】版では、‘One of his eyes resembled that of a vulture’ (彼の片方の眼は秃鷹のようである)に変更されている。

では、周瘦鵬と沈雁冰はこの部分をどのように訳しているのか。

周瘦鵬訳：「而一眸尤肖鷹眼」(片方の眸はとりわけ鷹の眼に似ている)

沈雁冰訳：「他兩眼中的一隻像鷹眼」(彼の両目の片方は鷹の眼に似ている)

以上、両氏ともに「片方の眼」と訳していた。翻訳の違いがこの点以外から見られないが、周瘦鵬と沈雁冰が【Griswold】版と内容を同じくするテキストを使用した可能性は高いと考える。本稿では、【Griswold】版を原作として、周瘦鵬訳並びに沈雁冰訳と比較するのに用いる。また当時は日本語からの重訳が多く見られた時期でもある。この状況を踏まえ当時日本で翻訳された“The Tell-Tale Heart”の翻訳2作品<sup>(19)</sup>と比較したところ、段落構成及び翻訳からみても重訳している可能性は低く、両氏ともに英文からの翻訳だと考える。



## 2-2、段落構成

次に底本の段落構成を見ておきたい。“The Tell-Tale Heart”は全18段落で構成されている。これに対し、周瘦鵬訳は6段落で構成されている。1段落から3段落までの段落は原著と同じく分けているが、以後には変更が見られる。原作の4～11段落を4段落目、12～17段落は5段落目、18段落を6段落目としている。

周瘦鵬の段落分けは、原作では細かに分かれている段落を纏めて一つの大きな段落へと変更している。一方、沈雁冰訳は、原作と同じ18段落で構成されており、原作との違いは見られなかった。

## 3、『心声』の翻訳分析

では、いよいよ『心声』の内容について考察してみたい。周瘦鵬、沈雁冰の翻訳『心声』はそれぞれ文語調、口語調で翻訳されている。当時の翻訳の主流は文語文で書くものであったため、周瘦鵬はそれにならったといえる<sup>(20)</sup>。しかし、周瘦鵬の翻訳作品を全て文語文で訳したわけではない。『心声』が収録された『欧美名家短篇小説叢刊』の50作品のうち口語の翻訳数は18作品見られた<sup>(21)</sup>。沈雁冰は、商務印書館編訳所で翻訳に携わっていた際は文言文を使用していた時期もある<sup>(22)</sup>。これは当時勤めていた商務印書館の状況によるもの大きい。周瘦鵬と沈雁冰の『心声』の翻訳は五四運動を挟み3年ほどしか離れていないが、五四運動を前後して大きな変化があったと考えられる。次から『心声』の翻訳分析を行っていく。

### 3-1、文章からみる翻訳の違い

本稿では『心声』の翻訳を分析する単位として、文章と言葉を分けて見ていくこととする。まず、文章の分析から見ていこう。周瘦鵬訳（以下、周訳）と沈雁冰訳（以下、沈訳）をそれぞれ原作と比較した結果、周訳においては（1）意識、（2）加筆・省略・移動などがおよそ40箇所見られた。一方沈訳の方は、ほぼ原作に忠実に訳され目立った文章構成の変更はなかった。ここでは（1）意識の例と（2）加筆・削除の例から、原作、周訳、沈訳の違いを見ていきたい。なお、沈訳の段落番号は原作と同じなため省略する。

#### （1）意識の例

第2段落（周訳：第2段落）

ポオ	I think it was his eye! yes, it was this! (あの眼ですよ！ ええ、あれですよ！)
周訳 (1917)	惟其眸子，至足令吾繫念。 <sup>(23)</sup> (ただその眼だけで、私を不安にさせるのに充分だったのです。)
沈訳 (1920)	我想來，我起這念頭是爲了他的一隻眼，不差，是爲了他的一隻眼！ <sup>(24)</sup> (思うに、私がそのような考えを起こしたのは彼の片目、そう、彼の片目のせいなのです！)

原作では男が老人の眼に不安を感じる様子を「あの眼ですよ！」とある。周訳は、この部分に「不安にさせる」という言葉を足している。「不安」という言葉を足すことで、男の感情をより鮮明にしようという意図があったと考える。一方、沈訳では「一隻眼 (片方の眼)」と原作と同じであった。原作は「eye」と単数形であり、「あの眼」と訳すところである。しかし、沈訳は「一隻眼」と訳しているのはなぜか。これはこの後に「One of his eyes resembled that of a vulture — a pale blue eye with a film over it.」とあることから、沈訳は「eye」を「一隻眼」と訳したのであろう。しかし「eye」を単数形で用いる場合は「視線、目付き」を意味することもあり、「片目」を指すとは限らない。周訳は「其眸子」(その眼)と訳すに留めている。

第5段落 (周訳：第4段落)

ポオ	I had my head in, and was about to open the lantern, when my thumb slipped upon the tin fastening, and the old man sprang up in bed, crying out — “Who’s there?” (私は頭を中に入れ、さてランタンの蓋を開こうとした時です、思わず親指がブリキの留め金にすべったかと思うと、老人がベッドの上に跳ね起き、——「誰だ、そこにいるのは？」と大声で叫んだ。)
周訳 (1917)	先入以首、開燈、而吾指忽觸銅扣、聲聞於老人、則即虎躍而起、揚聲呼曰：“誰入此者” <sup>(25)</sup> (まず頭を入れ、ランプをつけようとする、指がふいに銅製ボタンに触れてしまい、音を聞いた老人は、忽ち虎のように飛び起きると『誰が入ってきた？』と叫んだ)
沈訳 (1920)	我的頭既已伸進、且要開燈了、我的拇指忽然一滑、打在燈上的洋鐵鉤、老人在牀上跳起來、喊道：“是誰？” <sup>(26)</sup> (私の頭はもう中に入り、そして灯りをつけようとする、私の親指は急に滑ってランプの西洋式の鉄カギにぶつかったので、老人はベッドから飛び起き、「誰だ？」と叫んだ。)

この部分で周訳は、「my thumb (親指)」を「吾指 (私の指)」と変えて訳している。また「ベッドの上に跳ね起きる」を「則即虎躍而起 (虎のように飛び起きる)」とし、老人の驚き方をより誇張している。

上記の2点の例から、周瘦鵬の意識の特徴として、原作に独自の解釈を加える、または省略が見られた。ただ原作からかけ離れた訳ではなく、中国語の文章として自然なものにするための意識と言えるだろう。一方、沈雁冰は周瘦鵬に見られるような意識はなく、原作をほぼ忠実に訳したものであった。原作に忠実であるということは、中国語に訳す際に多少不自然と思われる訳になっているとも言える。

(2) 加筆・省略の例

次に加筆と省略について見ていこう。

第1段落 (\_\_\_は加筆箇所を示す。周訳：第1段落)

ポオ	How, then, am I mad? Hearken! and observe how healthily — how calmly I can tell you the whole story. (なんと、これでもまだ私は狂人でしょうか？ お聞き下さい！ いかにもとにも、いかに落ち着いて、話の一部始終を私が話せるかお聞きになるといいでしょう。)
----	---

周訳 (1917)	然則吾果狂耶。吾亦不自知。但觀吾體魄健旺，態度沈着，顯非狂易之徵。諸君諦聽，吾當盡舉吾事觀述之矣。 <sup>(27)</sup> (私は果たして狂っているのでしょうか？ 私もまたわからないのです。だが私の体や精神は健康そのものであり、態度は落ち着きがあるのを見ると、狂人の証は見られません。みなさん耳をすませて聴いて下さい、私はできるだけ私のことをつぶさに語りましょう。)
沈訳 (1920)	然則，我是癡麼？ 你且傾耳聽呀！ 你且靜看我講這樁故事時何等的安閑何等的清健。 <sup>(28)</sup> (果たして私は狂人なのか？ 耳を傾けて聞いて下さい！ 私がこの物語を語る時いかに気楽であるか、いかに健康であるかを静かに見て下さい。)

第1段落の周訳にある「吾亦不自知」と「顯非狂易之徵」は、原作に見られず加筆である。どちらも男の主張を付け足したものであり、男の感情をより具体的にしている。沈訳は原作の文章に対応している。

第4段落 (周訳：第4段落に相当、\_\_\_加筆、\_\_\_意識、〰移動、.....誤訳を示す)

ポオ	Never before that night, had I felt the extent of my own powers — of my sagacity. I could scarcely contain my feelings of triumph. To think that there I was, opening the door, little by little, and he not even to dream of my secret deeds or thoughts. I fairly chuckled at the idea ; (この晩ほど、私自身の能力の高さ一賢さを感じたことはなかったのです。もはや私は、勝ち誇った気持ちを抑えることができませんでした。私がここにおいて、ほんの少しずつ扉を開けているのに、私の密かな行いも考えも老人は夢にさえも感づいてはいないのです。そう考えると思わずクスリと笑い出しそうになりました。)
周訳 (1917)	吾於是夜，益覺已之聰明，爲常人所弗逮。自謂今夜必將死彼老人，功成而出。渠於斯時，又何嘗夢及吾之秘密。吾漸漸推門，機警絕倫，繼又蠢然而笑。 <sup>(29)</sup> (私はその夜、いよいよ自分の賢さは、普通の人には至れないと感じたのです。今夜は必ず老人を殺すと独り言をつぶやき、やり遂げてから出ることにしたのです。彼はその時になっても夢にも私の秘密を知らないでしょう。私は次第にドアを押しあげ、非常に知恵が働き、ついで歯を出して笑ったのです。)
沈訳 (1920)	前乎此夜，我從不曾覺得我自己的權力的界限——我的敏給。我忍不住我的得勝底感覺。你想，這兒是我，一點一點兒，開這門，那兒是他，做夢也不會做到我的秘密事知秘密思想。我轉到這念頭，心裏不禁格格地笑； <sup>(30)</sup> (この夜の前には、私は自分の権力の界限——自分の敏捷の界限を感じたことはなかった。私は自分の勝利の感覺を我慢できなかったのです。考えてもみなさい。ここで私が、少しずつこのドアを開けるのを、そこの彼は、夢にも私の秘密と秘密の考えを思いつきもしないのだ。私はこの考えに行きあたると、心の中で思わずくすくすと笑いださずにいらなかった。)

第4段落では、文章の複雑な改変が見られる。周訳は「To think that there I was, opening the door, little by little, (考えてもみろ、こうしておれは此処において、ほんの僅かずつこの扉を開けている)」の下線の前半部分を省略し、後半部分は「吾漸漸推門，機警絕倫，繼又蠢然而笑」へと移動し、後ろの文章と組み合わせている。「自謂今夜必將死彼老人，功成而出。」の加筆部分は、これから起こる行動を事前に読者へと知らせている。しかし原作では男は今夜こそ老人を殺すという明確な意思は描かれていない。偶然、老人を起こしてしまったことで起きた殺害であるため、この点は周訳の誤りである。

原作では、男が自己の賢さに酔う場面である「Never before that night, had I felt the extent of my own powers — of my sagacity.」の部分の沈訳は「前乎此夜，我從不曾覺得我自己的權力的界限——我的敏給。」と訳している。「sagacity (賢さ、聡明)」を「敏給 (機敏)」と訳し



ている。一方周訳は大きく訳を改変しているが、「益覺已之聰明」の箇所がこの部分にあたる。「sagacity (賢さ、聡明)」に、機敏の意味をなく、また「敏給<sup>(31)</sup>」は素早い動きを指し「賢明」の意味はなかった。この部分に関しては沈訳の誤訳と考える。

第7段落 (\_\_\_\_は加筆を示す。周訳：第4段落に相当。)

ポオ	I knew what the old man felt, and pitied him, although I chuckled at heart. (私には老人の気持ちがよくわかったので、老人を可哀そうに思ったが、心の内では思わずほくそ笑んでいた。)
周訳	斯時吾聞老人之呻，乃不期而萌憐憫之心。雖自匿笑，噤不敢發。 <sup>(32)</sup> (その時私は老人のうめき声を聞いて、初めて期せずして憐憫の心をもったのです。思わず笑いそうになったが、口をつぐみ声は発しなかったのです。)
沈訳	我知道老人感受的多苦，我可憐他，雖然我心裏是格格地笑著。 <sup>(33)</sup> (私は老人がどれほど苦しんでいるのか知っていたので、私は彼を哀れんだが、心の中ではクスクスと笑っていた。)

第7段落では、周訳は「I knew what the old man felt,」(私には老人の気持ちがよくわかったので、)の部分が省略され、「噤不敢發」(口をつぐみ声は発しなかった)が加筆されている。心の中で笑うという描写に対して、周訳は実際に笑いが出そうになった描写を付け足している。沈訳は、原作との違いは見られなかった。

上述の例から、周訳は概ね原文に沿った内容であるものの、いくらか独自の解釈を書き加えた部分や削除、文章構造と段落構成の改変が見られた。こうした例から、周瘦鵬の翻訳に対する姿勢は、1章で述べた胡適の翻訳姿勢に共通する部分がある。

一方沈訳は、多少の誤訳があるものの周訳に見られるような加筆、削除はなかった。同じく1章で述べた沈雁氷の翻訳観と比較して見よう。沈雁氷の述べる、翻訳は直訳すべきとする点と意味の通らない訳(「死訳」)の有無についてどうであろうか。『心聲』は直訳で訳されていたが、意味の通らない訳は見られなかった。「形貌(形式)」と「神韻(風格)」についてはどうだろうか。沈雁氷は、「訳文学書方法的討論」で「形貌(形式)」に多少の差異があっても、「神韻(風格)」を残すべきとした。沈雁氷の言う「神韻(風格)」とは何を指すのか。沈訳を見ると、中国語としては文章が硬く、文学的とは言い難い。一方、周訳は原作の意図を汲み取り違和感のない中国語へと翻訳している。沈雁氷の言う「神韻(風格)」が原文の風格を残すことよりも中国語の風格を出すことであるならば、翻訳として成功しているのは沈雁氷ではなく周瘦鵬の方であろう。しかし、沈雁氷の言う「神韻(風格)」とは、本当にそうなのか。『心聲』に付したポオの著者紹介で、沈雁氷は次のように述べている。

彼の著作は、とりわけ短篇小説がすばらしい——ほとんどは、幻想的で、非人間的であり、けれどもまたつねに我々の精神世界に押し寄せてくるのである。この種の短篇では、文章の構成や言葉の使いかた、至る所で極力これを表現しようとしている。それ故に彼の

言葉には一種別の美があるのだ。……この作品は “Illusion (幻想)” の力を表現しているらしいが、訳者の筆力は乏しく、素晴らしい文章を背負うのは如何ともし難い。ただアラン・ポオ先生に謝る他ない。<sup>(34)</sup>

この序より沈雁冰は、ポオは一字一句に至るまで細心を尽くして作品を仕上げている、と理解していたことが窺い知れる。沈雁冰はポオの作品を細部に至るまで直訳することで、ポオの作品の風格が伝わると考えたのではないだろうか。つまり、この翻訳作品では沈雁冰の言う「神韻 (風格)」とは、中国語に訳した時の文章の風格ではなく原作の持っている風格を直訳することで表現するものと考えられる。

### 3-2、単語からみる翻訳の違い

次に単語の翻訳をみていこう。

[1] ‘death watches’ (原作、沈訳では第6段落、周訳では第4段落にある)

ポオ	He was still sitting up in the bed, listening ; just as I have done night after night hearkening to the death watches in the wall. (彼は相変わらずじっと聞き耳をたてながら、ベッドに座っていたのです —— ちょうど私が、来る夜も来る夜も、壁のなかの茶立虫 (デス・ウォッチズ) の鳴声を聴きながら起きていたのと同じようにね。)
周訳	特亦不聞老人下眠, 似兀坐傾聽如故, 厥狀正與予前數夕之伺彼肖也。 <sup>(35)</sup> (また老人が横になるのが聞こえず、座ったまま耳を傾けているかのようで、その様子はまさに私が数日前の夜から伺っているのと似ていた。)
沈訳	他正坐在牀裏靜聽呢, 一正和我一樣, 一夜又一夜, 傾耳靜聽牆上的 <u>Death-Watcher</u> 。(按此是一類小蟲, 會發的答的答的小聲, 俗人迷信以為此是死的先兆。猶之中國南方人惡梟鳴, 以為陰間閻羅王差他來呼人去也。梟, 南方土名曰呼人鳥。) <sup>(36)</sup> (彼はベッドに座って聞いていたのである。——まさに私と同じように、一晩また一晩と、耳を傾けて静かに壁の <u>Death-Watcher</u> を聞いていたように。(これは一種の小さな虫のことで、バタバタと小さな音を発し、凡人はこれが死の予兆だと信じているのだ。中国の南方人が凶兆であるフクロウが鳴くのは、冥土から閻魔大王がフクロウを遣って人を呼んでくるという説に似ている。フクロウは南方では人呼び鳥という。))

原作の下線部分 ‘death watches’ とは ‘deathwatch beetle’ という虫を指す。この虫は古い木製家具や柱などの中に穴を掘って、カチカチと音を立てる小さな虫であるが、その音は死神の持つ死を刻む時計音 ‘deathwatch’ だとする迷信が名前の由来となっている。和名のシバンムシ (死番虫) も英名を由来とする。現代の中国語では「報死虫」や「告死虫」と訳される。周訳は、‘death watches’ を省略している。‘death’ (死) と ‘watches’ (時計) から想像すると例え虫と分からずとも単語単位で中国語に訳すことは可能だったと思われるが、周瘦鵬は訳していない。

沈訳では、‘death watches’ を ‘Death-Watcher’ と綴りを変更して掲出し、その後ろに「小さな虫で、チクタクという音を発し、一般に死の予兆だと信じられている。」と説明を加え、中国南方の迷信であるフクロウが死を呼ぶ鳥とするのと同じだとする彼の見解が付記されている。

周瘦鵬は削除し、沈雁冰は英単語のまま掲出したこの‘death watches’という言葉が、当時の中国においては馴染みがなかったことは想像に難くない。故に、両氏はこのような形で訳したのであろう。では、すでに中国より先に“The Tell-Tale Heart”を翻訳していた日本ではどう訳していたのか。

明治期に訳された小日向是因訳『心の音』（『帝国文学』、1900年5月）では、「翁は再び身を横たへむともせざるなり、いぶかしと耳かたぶけつつ、寢床の上に、かしこまりてやあるらむ。壁を伝ひ昇る、小虫の音に心をくばりつつたづめるとき、～」とし、大正期に訳された谷崎精二訳『物云う心臓』（『赤い死の仮面』所収、1913年）では、「彼はちつと耳を澄ませ乍ら床の上に立つたままであつた。壁際の死の番人の方へ耳を傾け乍ら、丁度每晚私が為た様」に」と訳されている。小日向訳では、「小虫」という言葉が見られるが、‘death’は訳されていない。谷崎訳は、「死の番人」とし‘watches’を時計ではなく番人の意味で捉えている。つまり小日向、谷崎共に‘death watches’を訳しきれていないことから当時の日本ではまだこの言葉が定着していなかったと考える<sup>(37)</sup>。

それでは、当時発行されていた辞書にはどう書かれていたのか。英和辞書並びに英華辞典でこの言葉を調べてみると、以下の通りであった。

(1) 日本で刊行された辞書

『英華和訳字典』2 (W. ロブシャイト著、中村敬宇等校正、山内 輓、1879年、899頁)	Death-watch 死虫、シニムシ (人誤テ其声ヲ聞クラ以テヒ トジニノ兆トナセシ)
『模範英和辞典』 (三省堂出版、1911年、426頁)	Death-watch ①臨終(イマハ)の看侍(ミトリ)。②通夜 (ツヤ)。③死刑番人。④[動]チャタテムシ <sup>(38)</sup>
『大正英和辞典』 (金港堂出版、1913年、374頁)	Death-watch ①瀕死者ノ最後ノ看護。②告死虫、チャタム シ(迷信家ガ死ヲ予告スルト認メル奇音ヲ發スル昆虫)

(2) 中国で刊行された辞書

『英漢模範字典』 (商務印書館、1929年、306頁)	Death-watch 死刑執行前看守罪犯之人。
--------------------------------	--------------------------

当時日本で刊行されていた辞書からは、原作の‘death watches’という意味を見出すことができたものの、このころの日本で訳された文章には反映されていない。一方、この時期に中国で刊行された辞書には、虫に関する記述を見出すことはできなかった<sup>(39)</sup>。『心声』の翻訳より後になるが、商務印書館が発行した上記『英漢模範字典』(1929)にはみることができた。

なお、ポオの“The Tell-Tale Heart”の翻訳は周瘦鵬と沈雁冰の『心声』以外にも、余子長訳『多言之心』<sup>(40)</sup>(1924年)と石民訳『惹禍の心』<sup>(41)</sup>(1928年)の二作品がある。余子長、石民共に経歴は不明である。二人の翻訳から‘death watches’の訳を見ると、まず余子長訳『多言之心』では、「他仍舊在牀上坐着聽——剛巧像我做的一樣，一夜再一夜，聽着壁上的錶聲(彼はまだベッドに座って聞いている——ちょうど私がしているのと同じように、一晩また一

晩と壁の時計の音を聞いている。)』と訳し、次に石民訳『惹禍的心』では、「他依舊坐在床傾聽着；——正如我從來每晚上市傾聽壁間的報死蟲（彼は相変わらずベッドに座って耳をすませている；——まさにこれまで私が毎晩壁の中の死番虫の音を聞いているように。）」と訳している。

余子長は ‘death watches’ を時計と誤訳しているが、石民は「報死虫」と正しく訳していた。また、石民訳では「Death-Watch: 是一種小甲蟲，其聲滴滴如鐘表聲，西俗視為死的預兆 (Death-Watch: これは一種の小さい甲虫で、その声はチクタクチクタクと鐘のような音がし、西洋では俗に死の予兆とみなす。）」という詳細な注釈が見られた。

余子長は誤訳し、石民は「報死虫」と正しく訳しているものの註釈をつけていることから、この言葉に対する認識の低さが伺いしれる。なお、周瘦鵬の ‘death watches’ の削除は、2章で述べた胡適の翻訳方法、すなわち「直訳できるものは直訳するが、もし訳しても人にわからない言葉であれば削除もやむを得ないだろう」に通ずるものとする。

[2] ‘hideous’

ポオ	“Villains!” I shrieked, “dissemble no more! I admit the deed! — tear up the planks! here, here! — It is the beating of his hideous heart!” (「この悪党どもめ！」私は夢中で叫んだ。「しらばっくれるのは止めてくれ！そうさ、この私がやったのだ！さあ、その板をめくるがいい！ここ、ここだ！これこそ彼奴の恐ろしい心臓の音だ！)」
周訳	吾引吭大呼曰：“万惡之人，假惺惺作態胡爲者！茲事吾實爲之，吾今自承矣。趣去此地板，亦觀彼尸。須知適所聽者，即彼中怒躍之聲也。” <sup>(42)</sup> (私は声を張り上げて叫んだ。「くそつたれどもめ、もったいぶってわざとらしい振りをしやがって！ここに、私は自分で認めよう。この床板を取り去れ、そして彼の死体を見るがいい。いましがた聞こえたのは、彼の心臓が怒りで跳ねた音だ！)」
沈訳	『你們這辨無賴！』我銳聲叫，『莫再裝假了！我說出來罷！——揭起這些地板！——這裏，這裏！——這是他的可惡底心的跳響？』 <sup>(43)</sup> (「このごろつきどもめ！」私は鋭く叫んで言った、「もうしらばっくれるんじゃない！私が言おうじゃないか！——その床板をもちあげるがいい——ここだ、ここだ！——これはあいつの胸糞悪い心臓の音だろう？)」

原作の下線部分 ‘hideous’ は、「見るも恐ろしい、ぞっとする」という意味である。この言葉についてラフカディオ・ハーンは「ポーが使い方にたけていたもう一つの語に「ぞっとするような」(hideous) という語がある。その言葉は、『隠しきれぬ心』という作品の結びで、巧みな効果を発揮している。」<sup>(44)</sup> と述べていることから、ハーンはこの語がポオ作品の演出にとって重要な言葉であると認識していた。

作品の結びを効果的に仕上げているこの言葉を周瘦鵬と沈雁冰はどう訳したのか。周訳は「怒躍」(怒り飛び跳ねる) と訳し、殺された老人の怒りを強調しているが、ぞっとするというニュアンスは失われてしまい、男の狂気が薄まっている。一方、沈訳は「可惡」(憎らしい、ぞっとする) と訳し、‘hideous’ のニュアンスを捉えていると言えるだろう。

以上、単語の面から見てきたが、当時の中国ではあまり馴染みがない言葉を訳すのか、また

は削除するのか。この点においても、両氏の違いが見られた。また、作品のクライマックスを締めるキーポイント 'hideous' をどう訳すのか。この点においては、周訳は原文のニュアンスを活かしきれていなかった。

## おわりに

中国におけるポオの最も早い翻訳は1905年に周作人が訳した『玉虫縁』<sup>(45)</sup>である。その後1949年までの中華人民共和国以前に訳されたポオ作品の翻訳数は確認した限りでは54あった。“The Tell-Tale Heart”の翻訳は、周瘦鵬を最初とする。周瘦鵬はこの作品以外に、『紅死』(“The Masque of the Red Death”(邦題『赤死病の仮面』)を翻訳しているが、沈雁氷はこの作品以外にポオの翻訳は見られなかった。沈雁氷はなぜ周瘦鵬と同じ表題としたのだろうか。原題は直訳すれば「告げ口する心臓」の意味であり、現在の中国では『泄密的心』(告げ口心臓)等と訳されている。

沈雁氷が『心声』を使った理由を当時の資料から見つけ出すには至らなかった。1916年から翻訳を始めた沈雁氷は、1918年以降になるとニーチェ作品の部分訳やチェーホフ、モーパッサン、ゴーリキーなどの短編小説を翻訳し『時事新報』・『学燈』などに掲載していた。アメリカを代表する作家であり、また日本・フランスなどに影響を与えたポオの作品を沈雁氷が翻訳しても不思議ではない。しかしすでに周瘦鵬が翻訳していた作品と同じ表題をつけて訳したのは沈雁氷に何か意図する点があったと考えられる。沈雁氷は『心声』を翻訳することで、文言文・意識で翻訳した周瘦鵬に対して、白話・直訳を実践する場として用いたことは明らかである。

沈雁氷の翻訳に対する姿勢は周瘦鵬の意識を主としたものとは異なり、直訳すべきであるとした。沈雁氷の『心声』の訳からは彼の翻訳に対する姿勢が現れている。彼は、原作の風格までも訳そうと努めた。原作と同じ段落構成や文章構成をとり、原作の雰囲気効果的に表現しようとした。また読者に馴染みのない言葉は無理に訳さず、原文の語句をそのまま使用し注釈を加えるという点も見られた。ただし直訳を重視するあまり中国語の文学表現としては淡白に感じられる。

一方、周瘦鵬の意識は、原作の意図を理解しそれを不自然ではない中国語へと訳している。ただ作中には加筆や意図的な削除が見られるが、その加筆や削除の箇所に関して言うと、当時よく見られた翻訳者の創作による加筆や削除、筋を大まかに意識するといった手法とは些か異なる。原作の英文を理解したうえで、自然な中国語へと翻訳している。当時の状況では、文言文に倣うのは致し方ない部分があり、一方西洋小説を読みなれない読者に対する配慮も含まれていたのであろう。加えて原作を直接翻訳した際に中国語との構造の違いから、適切に訳すことができない部分も多くあったと考える。



両氏の『心声』の翻訳からは、ただ単に翻訳方法が異なるだけでなく、考え方の相違が見られた。周瘦鵬は、胡適の翻訳手法に近い考えをもっていたと考えられる。つまり、周瘦鵬は読者が理解できる翻訳となるように心掛け、沈雁冰は原作を直訳することで、原文の雰囲気そのまま伝えようとしていたように見える。今回、『心声』を通じて両氏の翻訳に対する姿勢の違いを鮮明にすることができた。しかし課題も多く残る結果となった。本稿では、1917年と1920年という近いとは言え時期が異なる両氏の翻訳を比較した。1917年～1920年ごろの両氏の翻訳の実体をみるためにこの時期の作品をより多く見る必要がある。もし1917年と1920年の翻訳に変化が見られるならば、それを明らかにすることにより両氏の翻訳姿勢をより明確にすることができるだろう。また変化が見られた場合、両氏がどのような過程を経てそこに至るのかについても検証する必要がある。こうした点については今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) この政治小説は日本から強い影響を受けたもので、梁啓超などによって政治思想の宣伝、啓蒙活動に利用された。代表的な作品として『佳人奇遇』（東海散士著、梁啓超訳）や『経国美談』（矢野龍溪著、周宏業訳）などがある。
- (2) 韓南著、葉雋訳「談第一部漢訳小説」、『文学評論』2001年第3期、2001年5月、132～142頁、〔这部翻译小说表明是长篇小说《夜与晨》(Night and Morning)的前半部,其作者是英国作家利顿(Edward Bluwer Litton)(1803～1873),原著最初出版于1841年。〕
- (3) 郭延礼氏も同様に最も早い翻訳として『昕夕閑談』をあげているが、作品の一部分の翻訳を含めると、1872年に『申報』に掲載された『ガリヴァー旅行記』の小人国を始めとしている。『中国近代文学发展史』第3卷(山东教育出版社、1991年)1512頁、〔我国翻译的外国小说最早是《申报》1872年4月15日至18日刊登的《谈瀛小录》,此为《格列佛游记》(英国斯威夫特著)中的小人国部分,约5000字。《申报》同年4月22日又刊登《一睡七十年》(美国华盛顿·欧文著),千余字。这两篇译文均未署译者名字,又系节译,故未算作中国翻译外国小说的第一部。〕
- (4) 包天笑著『鈞影樓回憶錄』、大華出版社、1971年6月、325頁、〔這時候寫小說,以文言寫尚,尤其是譯文,那個風氣,可算是林琴翁開的。林翁深於史漢,出筆高古而又風華,大家以為很好,靡然從風的學他的筆調。後來到五四時代,極力提倡用語體文的如魯迅,胡適之輩,所譯寫的短篇小說,也是用文言的,其餘的更不必說了。〕
- (5) 本稿に登場するポオの邦題は、『ポオ小説全集』1～4(創元推理文庫、1974年6月)に依拠する。
- (6) 周瘦鵬訳『欧美名家短篇小説叢刊(中)』(中華書局、1917年2月)に所収。
- (7) 『東方雜誌』(17卷18号、1920年9月)に掲載。
- (8) 『佛教大学大学院紀要、文学研究科篇』43号、2015年3月、P169～P186。
- (9) 李燕、張璘「周瘦鵬对外国小说的译介(1911-1947)」、西南农业大学学报(社会科学版)第10卷第12期、2012年12月、P129。
- (10) 『上海畫報』第334期(1928年3月)、「記許楊之昏」。
- (11) 『上海畫報』第406期(1928年10月)「胡適之先生談片」、〔我道、先生譯作、可是很忠實的直譯的麼、胡先生道、能直譯時當然直譯、躺冇譯出來使人不明白的語句、那就不妨刪去、即如這戒酒篇中、我也刪去幾句、說著、立起來取了一本歐亨利的原著指給我瞧道、你瞧這開頭幾句全是美國的土話、譯出來很喫力、而人家也不明白、所以我只採取其意、并成一句就得了、我道、我很喜歡先生所譯得作品、往往是明明白白的、胡先生道、譯作當然以明白為妙、我譯了短篇小說、總得先給我的太太讀、和我的孩子們讀、他們倘能明白、那就不怕人家不明白咧〕〔標点符合「、」は原文に基づく〕、本文で

の引用は拙訳。

- (12) 『茅盾回想録』(立間祥介・松井博光訳、みすず書房、2002年9月)、P111~P120。
- (13) 「譯文學書方法的討論」、〔翻譯文學之應直譯，在今日已沒有討論之必要〕
- (14) 「『直譯』与『死譯』」、〔近來頗有人詬病「直譯」；他們不是說「看不懂」，就是說「看起來很吃力」，我們以為直譯的東西看起來較為吃力，或者有之，却決不會看不懂。看不懂的譯文是「死譯」的文字，不是直譯的。〕
- (15) 「譯文學書方法的討論」、〔就我的私見下個判斷，覺得與其失神韻而留形貌還不如形貌上有些差異而保留了神韻。〕
- (16) 正式名：The Pioneer: A Literary and Critical Magazine。1843年1月、マサチューセッツ州ボストンにて創刊。出版社 Leland and Whiting、編集者 J. R. Lowell と R. Carter。同3月、Vol. I・No. IIIにて廃刊。ポオの作品としては、短篇“The Tell-Tale Heart”、詩“Lenore”及び評論一篇を掲載。
- (17) Harrison, James A. ed.: “The Complete Works of Edgar Allan Poe”, Volume 5, AMS Press Inc., 1965, 2nd ed., 1979.
- (18) 1845年1月、ニューヨーク州ブロードウェイ・ストリートにて創刊。最初の編集者は Charles F. Briggs であったが、3月にポオが加わり、10月にポオが経営権を取得して、単独主編となる。のち経営難のため1846年1月に廃刊。短命に終わった週刊紙。ポオによる文芸批評、自作の再録がある。
- (19) 小日向是因訳『心の音』(『帝国文学』、1900年5月)、谷崎精二訳『物云う心臓』(『赤い死の仮面』所収、1913年)
- (20) 前掲注4参照。
- (21) 范伯群、周全「周瘦鵬年譜」(『新文学資料』2011年1期)、P171。
- (22) 『茅盾回想録』(立間祥介・松井博光訳、みすず書房、2002年9月)、P111~P120。
- (23) 周瘦鵬訳『欧美名家短篇小説叢刊(中)』、中華書局、1917年2月、217頁。本文で引用する周訳の句読点は、筆者による。
- (24) 『東方雜誌』、17巻18号、1920年9月、100頁。
- (25) 前掲注22、219頁。
- (26) 前掲注23、101頁。
- (27) 前掲注22、217頁。
- (28) 前掲注23、100頁。
- (29) 前掲注22、219頁。
- (30) 前掲注23、101頁。
- (31) 『莊子』徐無鬼「有一狙焉，委蛇攫搔，見巧乎王王射之，敏給搏捷矢。」
- (32) 前掲注22、219頁。
- (33) 前掲注23、101頁。
- (34) 前掲注23、99頁。〔他的著作，尤以短篇小説為甚——大都是幻想的，非人間的，然而却又是常來我們精神界中撞擊的。他此種短篇，造句用字，處處極力表現這個目的；所以他的文字另有一種美。……此篇之意似在描寫“Illusion”的力量，譯者筆拙有負妙文，沒奈何只好對不住亞倫坡先生了〕。
- (35) 前掲注22、219頁。
- (36) 前掲注23、101頁。
- (37) 『告げ口心臓』(『ポオ小説全集』3、1974年6月、226頁)では、〔ちようどわしが、来る夜も来る夜も、壁のなかの茶立虫(デス・ウォッチズ)の鳴声を聴きながら起きていたようにね〕とある。
- (38) 虫の図入りで説明。
- (39) Robert Morrison『A Dictionary of the Chinese Language』(1819年)、Walter Henry Medhurst『Chinese and English Dictionary』(1842年)、Kwong Ki Chiu(邝其照)『英華字典』(1866年)、顔惠慶『英華大辞典』(1921年)の辞書には‘death watches’の記載はなかった。1956年に香港で出版された『英華大辞典』(鄭易里、曹成修主編、総合書店出版)には、〔臨終的看護、守夜、死囚看守人、〔虫〕報死虫、嚙虫〕の記載が見られる。

ポオ“The Tell-Tale Heart”の五四前後の漢訳について（白須留美）

- (40) 『小説世界』5巻7期、1924年2月に掲載。
- (41) 『北新』2巻23期、1928年10月に掲載。
- (42) 前掲注22、223頁。
- (43) 前掲注23、105頁。
- (44) 「エドガー・アラン・ポーのフランス語訳」（斎藤正二、他訳『ラフカディオ・ハーン著作集』第5巻、恒文社、1988年7月、P350）、『隠しきれぬ心』は“The Tell-Tale Heart”を指す。
- (45) 『玉虫縁』会稽碧羅女士（周作人）訳、小説林社、5月。山縣五十雄（訳注）『宝ほり』の重訳。

【参考文献】

- (1) 郭延礼著『中国近代文学发展史』第1～3巻、山东教育出版社、1990年3月。
- (2) 田中西二郎他訳『ポオ小説全集3』「告げ口心臓」、創元推理文庫、1974年6月。
- (3) 中野好夫訳『黒猫・モルグ街の殺人事件』「裏切る心臓」、岩波文庫、2009年4月。
- (4) 包天笑著『鉏影樓回憶録』、大華出版社、1971年6月。
- (5) 宮永孝著『ポーと日本 その受容の歴史』彩流社、2000年5月。

（しらす るみ 文学研究科中国文学専攻博士後期課程満期退学）

（指導教員：李 冬木 教授）

2018年9月28日受理